『ミスター半導体　西澤潤一を父として
～光を求め光の彼方へ～』
著者　髙橋恵子さんインタビュー

小学館スクウェアより2024年10月17日発売

（Ａ５判 本文234ページ　定価：本体価格1,500円＋税）

西澤 潤一　（1926～2018）

宮城県仙台市出身

東北大学名誉教授、岩手県立大学名誉教授

東北大学総長　　（1990～1996）

岩手県立大学学長（1998～2005）

首都大学東京学長（2005～2009）

半導体や光通信などの研究で数多くの業績を挙げ、「ミスター半導体」と称される。

著者である髙橋恵子氏の父。

著者　髙橋恵子さんへのスペシャルインタビュー

髙橋恵子さん

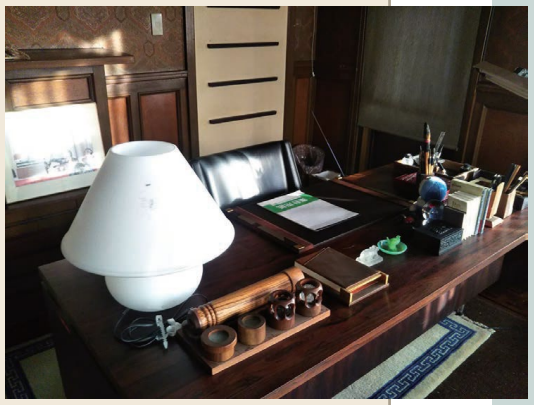
インタビュアー：まずは著書の出版、おめでとうございます。今回、本を執筆されることになったきっかけを教えてください。
（以下「I」）

髙橋さん　　：西澤が亡くなり、東北大学で追悼の会が開催され、何人かの方々が追悼文を投稿してくださいました。私としても
(以下「髙」)　このままフェードアウトさせるのではなく、何か残したいと漠然と考えていました。そんなときに、自分史・家族史の出版を手掛けていらっしゃる（株）はなもく堂の志伯社長から、西澤に関する本を出しませんかとお誘いがあったのがきっかけです。

I　：執筆を決心されるまでには葛藤はありましたか？

髙　：それはありました。私は素人で本を書いたことなどないわけですし、長い間、家を離れていましたのでお断りしていましたが、志伯さんの大変熱心な説得に負けて、書いてみることにしました。

書き始めた後、インタビューした方が増える度に書き直しも行いました。ただ、書いていくうちに、また西澤の遺品を整理する中で、これまで見たこともなかった西澤の書いたものや写真を目にして、加えて、西澤亡き後にお弟子さん達と連絡を取らせて頂くこともあり、やはり何か残せるものなら残したいと少し欲が出まして、志伯さんや編集者の方、出版社の支援もあり、本を完成させることができました。



西澤先生の書斎机

Ｉ　：本を拝見するとかなりの方にインタビューされていますが、インタビューを重ねる中で、髙橋さんが知らなかった、父・西澤先生の姿はありましたか？

髙　：それはたくさんありました。岩手県立大の創設のときの話ですとか、あとは研究室の日常のことは全然知らないわけですよね。いろいろな方が仕事を一緒にする上で、ご苦労をよく乗り越えてくださったなと思いました。そういった仕事に対する姿とともに、西澤「大先生」ではなく、偉そうなことを言ったりしてますけど、なんかいい加減なこともするおっさんだよっていうところを描きたかったというのはあります。

父・西澤先生からのメキシコ土産を身に付ける高橋さん

Ｉ　：西澤先生は研究に関してかなり厳しい指導もされていたようですが、皆さんに慕われていたように思えます。その一方、高橋さんご自身は本の中で、西澤先生が「家族のために一生懸命やればやるほど家族は近づけない、家庭内での孤独感」を感じていたと書いており、家の中と職場とでは、西澤先生の姿は違っていたと思われます。その差については、どのようにお感じになりますか。

髙：外では誰も成し遂げていない仕事を前に、世界一を目指して研究を進めなければならないという厳しさはあったと思います。施設や設備も最初からあるわけではないですし。機械は丸ごと買うことができず、自分たちで作らなければならないけれど、その場合でも本当に作るべきなのか考えろと言っていたようです。

一方、家庭人としては、信じられないぐらい無駄なものをたくさん買ってくるわけですよ。もう本当にうちの中はごった返しましたからね。私たち子供が「欲しい」と言っていないものも買ってくるんですね。まあ嬉しい時もありますけど、もうアップアップで要らないっていうのに、まだまだ与えようとする。そうするとこちらは機嫌が悪くなり、向こうも悪くなるという悪循環でしたね。その辺がね、もうちょっと仕事場と家を中和させてくれたら皆さんから慕われたんじゃないかな。

Ｉ　：西澤先生は家父長的な考えをお持ちだったようですが、帰ってきたときのお出迎えや、家を出る時のお見送りなどは求められましたか。

髙：それは父が一時期要求していました。まず「お父様」と呼べとか、自分が帰ってきたときには三つ指ついて「お帰りなさいませ」と言えとか、言われたことがあります。時期としては中学・・・高校・・・高校ではもう諦めていたかも（笑）。

Ｉ　：本では、父である西澤先生のことを語るとともに、「親子関係に悩む方々や介護を考える方々の参考にでもなれば幸甚」と書かれてあります。そのお言葉通り、介護に関して詳しく記述されていますが、一方で、エネルギーの塊のような西澤先生の姿を記憶している方にとってみれば、最晩年の、特に施設に入った後の様子などはショックを受けるようにも思います。西澤先生の最晩年の姿を書き記すことについて、葛藤はありましたか。

髙：まあ葛藤はありました。普通は隠しますよね。だけど私と同年代の多くの方が介護を現在進行形で経験されています。また、親の介護を終えられた方のお話を聞いたりする中で、やはり隠さずに書く方がよいだろうと考えました。それは別に恥ずかしいことでもなく、人間として当然で、日常でもあるのだから、もっと皆さん知っておいた方がよいのではないでしょうか。

特に今、祖父母と同居されてる方って少ないですよね。老いというものを見ないまま、自分が遠距離で介護を担うことになったりすることもあります。私は子供はいませんが、私たちの世代のお子さんたちは本当に老人を理解する機会がない。だから書いておいた方がよいというのが私の選択でした。
それでも、出版社の方にも「本当に書いてもよいのですか」と問われましたが。

Ｉ　：西澤先生本人は、体力が衰えていくにつれ、高橋さんに迷惑をかけたくないというような意識が垣間見えたり、感情を出したりしたことはありましたか。

髙：トイレを失敗した時に「すまんな」と言われましたし、デイケアに行く時も「俺はみんなの迷惑になるんだ」って言われたりしました。やはり父なりに寂しかったんだと。これまでできていたこともできなくなり、みんなに迷惑をかけているのではないかという意識はあったと思いますね。
そのあたりも父親の純情さかなと思います。その気持ちがあったから、私も傍にいたんだと思いますよ。

リハビリに励む西澤先生

Ｉ　：本の中で、最晩年になっても診察のたびにお寿司を食べていた、というエピソードがありましたが、食べることにはこだわりがあったということでしょうか。

髙：ありましたね。昔なじみのお寿司屋さんがありましたけど、西澤が来ると分かっている時はネタを別に用意していると言ってましたから。「いらっしゃるときは前もって言ってください」とも。私も若い時に連れていかれたことがありますが、それは彼なりの、一種の教育だったのかもしれませんね。

Ｉ　：髙橋さんご自身も色々なご経験をされていらっしゃいますね。チェコには数年滞在されたとか。

髙：２年ですね。外交官である夫とともに滞在しました。日本の外交官の場合は2～3年で異動ということが多いみたいですね。海外の外交官一家だと、ここで生まれたこの子がもう20歳を超えたとか、子どもがその国の人になってしまうという話があるぐらい長い赴任になったりしますけど。
西澤がチェコに来たことがありますが、食べ物以外にも、買い物もパワーの源でした。こちらは、買い物されちゃたまらんなと思ってわざと歩かせたんですよ（笑）。山から街に下っていって、もう意識を失いそうになるまで歩かせたんですけど、街でモーゼルという高級ガラスのお店を見たら西澤の元気が蘇って、これを買う、あれを買うと始まって、なんとか一つにさせました。　私自身は買い物すると疲れちゃうんですけど。

西澤先生ご夫妻

西澤邸からの眺め

Ｉ　：今回のインタビューでもそうですが、本の中では、髙橋さんが西澤先生を「西澤」と記している場合と「父」と記している場合があります。本の中で「西澤」と記しているのは、編集上の都合だったのでしょうか。

髙：自分でも不思議なんですが、時々「父」となってましたね。第三者的に「西澤」で統一しようと思っていたんですが、書いているうちに「父」と書き表していて。矛盾しているなとは思ったのですが、書いた時の心境には自分でも分からない何かがあるのかもと思い、そのままとしました。

大掃除後の
西澤先生のお餅つき

Ｉ　：本には、西澤家のお正月の様子が記されています。お正月はお弟子さんが挨拶に来られて、一緒に食事されたそうですね。

髙：だいたい1月2日がお客さんデーで、午前中から客人が出たり入ったりで、夜から宴会するのが恒例だったんです。そうすると夜の宴会にいらっしゃる方とか、午前中に来られて一旦帰って、またいらっしゃる方もいて。もう本当に出入り自由でした。一方、私たち子どもは「仲居さん」役でした。
父は、お客様がいらっしゃるので午前中はわりと難しい顔をしていたりするんですけど、宴会になると無礼講。お酒はあんまり強くないのに飲んでヘベレケになって、その時は結構上機嫌ですね。
賑やかなのは好きでした。

父の背中によじ登ろうとする
幼少期の髙橋さんとお兄さん

Ｉ　：楽しそうな情景が目に浮かびます。西澤先生を敬愛してる方々が大勢訪れていたのですね。

髙：父はみんなに近寄ってほしいと思ってるんですけど、まわりは怖くて近寄れなかったと思います。でも、大学関係者ではない女性には、モテたりしてたんですよね（笑）。

Ｉ　：そんなお話も（笑）　。
本日は貴重なお話、ありがとうございました。

関連リンク

○プロモーションムービー

『ミスター半導体　西澤潤一を父として
～光を求め光の彼方へ～』

○関連書籍

『西澤潤一・人間道場　研究を経営するとは、どういうことか』
（鈴木壯兵衛 著　水曜社　2024年）

『西澤潤一の絵と魂』（※）
（鈴木壯兵衛 著　ファストブック（ラーニングス株式会社）2024年）

※サンプルとして第１章まで閲覧可能です。